

PDF版 小説 体験版
異世界迷子少女



◆シナリオ:月見
◆イラスト:鮭乃蔵 不偶
◆キャラデザイン:えふいろん

★編集構成★
ひなた古書堂

本作品は体験版となります。

作品の途中までお楽しみ頂けます。

動作確認などや、作品に雰囲気などを感じて頂ければ幸いです

あらすじ

竹取美伽は、普通の女子校生
いつも通りの日々に満たされながらも
今日も普通に帰宅し、家のドアを開けた時

そこは異世界だった。

誘拐現場を目撃し、あえなく山賊に捕まり
手足を縛られ、口を塞がれる。
そんな非日常にとまどいながら
ある女性達との監禁生活。

ミルフィーと名乗る現地人と出会い
リリーと言う名の魔術師に助けられ

美伽の異世界迷子は続く。

制作・著作 ひなた古書堂
<http://hinatakosyodou.blogspot.jp/>

異世界迷子少女

竹取美伽(たけとり みか)

本作のもう二人の主人公でありヒロイン。
金髪に褐色の肌を持つが、生まれ育ちも生粋の日本人。
さらに、ある有名火を祖先とするサラブレッド。
気づいてないのは本人だけ……

ミルフィー・ミスリッド・ワーズワース
考古学者。主に古い魔術や世界史を専門とする。
魔術世界《アベラジョン》の5大国のうち
筆頭国ラフィット・ロスシルド国の貴族出身。
高レベルの魔術師や学者を世に輩出している家系。
現在、とある王国のお抱えとなっている。



異世界迷子少女

元来、私は妄想が得意なタイプではない。

もちろん都合の良い妄想をしない訳ではないが、ドラマや小説ましてやアニメやドラマのように物語を膨らます才能は、あるとも思っていないし、また育ててもない。

平凡を気取る訳ではないが、特別な才能がある訳でもない。

私こと、竹取^{たけとり}美伽^{みか}は思う。私という人間は、そして女子校生という意味では、大多数に属するごく一般的な女子校生なのだと。

「いやあ、地毛が金髪に近くて、焼いてもいないのに肌が褐色に近い日本の女子校生はそういないよ」

「だよー、しかも部活もしてないただの帰宅部ってのが逆に不思議だよー、別にチャラチャラと遊んでる訳でもないのにー」

今は下校途中。

最近このあたりを周っている車内販売のクレープ屋さんのオープンチエアに座り、ガールズトークを楽しんでいる。

私の友達『多岐川^{たきがわ}るい』『石川^{いしかわ}葵^{あおい}』は、人気の苺のクレープを頼張りながら、楽しそうに笑っていた。

事あるごとに私が「普通」を語るので、面白がって反論してくるのだ。

「あんたらもこの髪と肌になってみればいいのよ。私の苦労がわかるんだから」

今でこそ、気にならなくなったが、この生まれつきの金髪と他者よりも褐色に近い肌であるが、幼い時にはそれなりに苦労があつたのだ。

義務教育を終えて、私が入学した次の学校は、髪と肌は生来のモノと事情を説明すると、髪の色は染めなくてもよいと言う寛大な配慮をくれ

た。もっとも髪の色などをとやかく言わない学校を選んだのだが、その
かいがあつたというものだ。

「でもさー、美伽ちゃんは氣をつけた方がよいよねー」

「なにをよ？」

「ほらほら、美伽ちゃんつてさー、見た目可愛いし、性格も悪くない
し、それでその個性的な髪と肌してるじゃん？ かなりマ・ニ・ア向け
の容姿してると思うんだー。だから油断してるとバクツと誘拐されちゃ
うかもかもよー」

いい笑顔で手に持ったクレープも似合う、葵。口についたクリームの
せいでちよつと幼く見えるけど。

しかしながら口から出た言葉は少々幼い外見と反比例し、至極物騒な
モノだった。

「あんたのトコロの演劇部長みたいな事言ってるじゃないわよ」

葵は演劇部に在籍している。

うちの学校の演劇部は、内外より総じて評価が高い。色々な賞を受賞していたりする。

様々な形式の舞台や脚本をこなすのだが、中には誘拐や監禁などのワイドもチラホラ見え隠れしている。もちろん、そのような、いかがわしいものでは決してないのだが、気が付くと人気の作品がお姫様の誘拐からのラブストーリーだったり、ピンチになった女性探偵の大脱出劇みたいなストーリーが半分くらいを占めているのも事実である。

「あー本当だー。あはは、ごめんごめん。私もつい考え方がトモと同じになっちゃったよ」

「そうだよ、アオイ。馬鹿な事言っちゃダメだよ。演技でも拘束されるのって結構窮屈なんだから……」

「いや、ルイ、あんたも相当な事言ってるから。誘拐イコール拘束っていう脳内変換はどうなの？」

「え？ 私も変？」

トモとは演劇部の部長の事だ。そして葵は演劇部員。ルイは私と同じ帰宅部。だがルイは、その持って生まれた好奇心を発揮して運動部・文化部問わず、正式な部員じゃなくても活動許可が下りるモノは、全て参加している。そしてそのどれもが非公式ではあるが素晴らしい成績を残している。

本人から言わせれば、色々な事が出来てよいとか。

その中でも演劇部への参加では、部員でもないのに、良い配役を得たり、いい演技をしたりと評判も高い。

先ほど言った通り、拘束されたお姫様や探偵の役などルイが好演しているモノもあり、一部のマニアからはかなりの信仰を勝ち取っている。この子の方がよっぽどマニア向けしてると思う。

「じゃあ、一つ聞くけど、この中で身動きが出来ないくらい手足をキツく縛られた経験があつて、ドラマみたいに廃墟やら部屋やらに閉じ込められた事のある人、手を挙げて」

予想通り、ルイとアオイは手を挙げた。それも「え？美伽ってそんな経験もないの？」くらいの表情をこちらに向けてくる。

おお、ビヴァ、変わった人達。これが私の愛すべき友人の一人。

彼女らの拘束体験のどれもが演劇部の活動の延長線上だとは思うんだけど、ルイやアオイって部活外で結構危ない目に遭つてるって聞くし、全部笑い飛ばせないのが実情。あまり深く聞いてないけど、強盗や泥棒に結構遭遇してるとか。そうやって考えると無事な事を喜ぶべきなのかも知れない。

「ついでにねー、ルイ。手足縛られると、やっぱり猿轡されて声を出せ

ないようにするのが犯罪心理ってヤツかな。実際やられると苦しいし、伝えたい事が伝わらないからもどかしいよねー」

「まあね、あとガムテープとかはちよつと嫌かな。アレ、匂いが結構するし、唇とか肌が荒れるし。ただ使いやすいんだろうねー、結構くつついて取れないし」

「あと、命の危機とかになんないなら、縛られた状態でどれだけ速く移動出来るかとか、試すの結構楽しいよねー」

「アオイは、後ろ手に縛った状態でのパン食い競争、超早いし」
「手どころか足も縛った状態の競争でも上位取る自信あるよー」

拘束談義。

世界よ、これが日本の年頃の女の子の会話だとは思わないで欲しい。
切実に。

「あんたら見てると、私の悩みなんか、ちっぽけなモノだと思う。ルイやアオイを見てると救われるわ」

「それって、いい意味で言っていないよね？」

「あはははー」

それでもこの二人は私の大切な友達。

ちよつと日常とは外れた会話も悪くはない。

だからこの日、二人と別れてからの家路は、普通ながらも心が満たされる思いもあつた。

そうして着いた自宅。

大きくないとはいえ、一軒家。自分の部屋もあるこの家はそれなりに愛着もある。

いつものように玄関のドアノブに手をかけ、開くと見慣れた家の中。

いや、そうなるハズだった。

ドアを開いた瞬間、ヴウン、と聞いた事もない音が私の耳を満たした。

「……え、森？」

開かれたドアの先は、森だった。日光は差してるようだが濃い木々のため薄暗い。

突然、見慣れない視界が広がり私は固まった。ドアノブに掛けた右手を見るとそこには何もない。横を見れば開いたはずの扉は消えていた。後ろを見れば、ただ同じように森が佇んでいる。

「何よ……コレ」

思考が、理解が、何もかも追いつかない。

ただ一点だけ。これは【普通】じゃない……。乱れた脳内で、そんな事だけが駆け巡った。

さらに落ち着くまでしばらく時間が掛かった。

幸いな事に先ほどのクレープをテイクアウトしていたので、それをかじり、思索のため脳内に糖分を補給する。実際には食欲もなかったが、とにかく冷静になりたかった。

それが良かったのか、気が動転してはいるが、現状を整理するのには問題ないトコロまで回復できた。

「えっと……まずは、携帯の電波は……やっぱり圏外か」

電話は通じなかった。

周りを見れば変わる事のない森の風景だったが、人が通ったような形

跡もある。獣道というヤツかも知れない。

「……わからないけど、歩くしかないよね」

私はその道を少し歩く事にした。

当てがある訳ではないが、このまま何もしていないよりはずっといい。

そのまましばらく歩き続けた。

帰宅部だが体力はある部類だと思う。身体は辛くないが、精神はずっと不安なまま。不安の原因の一つとなっている現在の状況を考える。そうするとある仮説がチラチラと頭の中をよぎる。

それは、はつきり言って『ありえない仮説』だった。

「まさかね……」

その時、道の先から人の声が聞こえた。私は警戒しそっと近づいてみた。木陰に身を潜めて、そっと覗き見る。始めは何を喋っているか全く理解出来なかったが、しばらく聞いていると随分と馴染みのある言葉が聞こえる。日本語だ。

そこにいるのは日本人ではないが、まさしく人間。ただし、私が樂觀出来る程、現在の状況は恵まれてはいなかった。

「ま、マルゴーとか言ってるけど、マルゴーって確かフランスのワイン産地よね。ここってマルゴーって場所なのかな。それに外国人……だとは思うけど、不自然なくらいに流暢に日本語。それに担いでるのは、女性だよね？ 控えめに言っても救助って雰囲気じゃないわ……」

彼らの着ている服装が明らかに現代社会のモノでない事を物語っている。中世欧風の、よく映画で見るような服装。女性の着ている上着にスカートも同じような作りだった。

見る限り、目の前の男二人は、その簡素な服装に似つかわしくない大振りのナイフ、いや剣と言って差し支えない武器を所持。そして担がれてる女性は、縄で後ろ手に縛られ、口と鼻には布を巻かれていた。

あまり考えたくない状況だが、これは……

「誘拐だよね」

男二人は女性を担ぎ、男達の本拠地であろう小屋へと入っていった。

私はここまでの過程を整理した。

ここは日本か？

いいえ、人間観察を試みるにとっても私がいた日本とは呼べない。

ではこれは、映画・ドラマのセットなのか？

いいえ、どこにもカメラなどの機材、そしてそれらを補佐する人間が見当たらない。

私は寝ぼけて夢を見ているのか？

いいえ、ベタではあるが痛みは感じる。そして夢にしては、私にはつきりとした意識が有り過ぎる。

答え、いや現状をまとめると、日本にいたハズの私は、何故か別の地域に移動し、そして目の前に誘拐された女性を発見してしまったという事。これだけ突拍子もない出来事に遭遇すると、普段なら絶対に信じない事でもそれを信じてしまう。

夢でないとするとこれ以上の深入りは危険だ。危機感の薄い日本という国に生まれた私でもそれを理解した。

「でもある程度の調査は必要だよね」

私は、危険を承知で小屋を調べる事にした。

私は小屋と呼んだが、それは大きな建物だった。

木材で出来た二階建てのその小屋は、奥行きがあり、外側から見た感じでは広い建物だった。よくわからないが、何かの施設の廃墟だったものを男達が利用している雰囲気。私は出来る限り建物に近づいた。窓にはガラス板ではなく、細い木を組んだ板がその代わりになっている。今は日中のためか開いているようだ。

そして、奥に格子枠の窓を見つけた。いかにも怪しい牢屋のような、人を閉じ込めておくような雰囲気のところ。私はそっと近づき、中を覗き見た。

「ん……あれは、あの女性？」

予想通りそこには女性が監禁されていた。

薄い青紫色の上着、ミニスカートにショートブーツまでは良いのだが、頭の髪飾りや宝石のような装飾品の使い方は、総合するとファンタジー物語に出てくるヒロインのような服装に似ていた。よく見れば私と似た歳にも見える。

「ひどい、あんなにしくても逃げられないのに」



女性の手は後ろ手に、胸にも縄を掛けられ、縄で何重にも縛られている。

下半身には、足首・膝・太ももと三か所に縄を巻きつけられ、口には、先ほどの布はとられているが、代わりにコブのついた布をきつく噛まされていいる。あれでは喋ったとしても呻き声にしかない。女性の動きを肉体的・精神的に封じていた。

女性が気を失っているのが、唯一の救いだと思えるくらいに。

私は、ヒーローやヒロインになどなるつもりもないし、なれるとも思っていない。

ただ女性を助けてあげたい、という強烈な衝動に駆られた。自分の能力を考えたとしても愚かな行為だったかもしれない。もしかしたら、殺されてしまうかもしれない。そんな想いと葛藤を繰り返し、私は決意した。

「よし……待っててね、すぐに助けてあげるから」

私は裏口らしきモノを発見し、扉まで進もうと隠れていた木陰から身を乗り出した。

立ち上がろうとした時、制服の腕部分に違和感。

どうせ木がひつついていると思った私は、それを払った。しかしそこに木はなく、次の瞬間には腕ごと引っ張られた。そして首には、ヒヤリとする金属の感触。

「ひゃっ！……あ……いや……」

先ほどの男の一人が私の後ろにいた。ずっと息を潜めて私を監視していたらしい。すでに女性を抱えてる場面から私がいる事に気づいていたのかもしれない。

男は無言だった。しかし、剣からは「騒げば斬る」という考えが伝わってくるようだった。私は動けなかった。

「あ……」

男は、ゆつくりと私の首から剣を外した。しかしそれでも私はへたには動けなかった。首から剣を離れただけで、男はおそらくいつでも私を斬る事が出来る。たしかそれを剣道で『残心』とか言っていたな、ルイが。

男の握る力は強かったが思ったよりも優しく扱われた。

掴まれた右腕を後ろに、そして左腕も同じように後ろにまとめられ、シウルシウルと縄を巻きつけられた。私が新聞紙を括へくくゝる時に使う、ビニール紐とは違い、植物のザラザラとした感触、無暗に縄抜けをすれば手がすり傷だらけになりそう。

両手首が完全に固定された。縄の痛みはそれほどでもないのに、手は抜け出せず結び目は固い。縄はそのまま、私の胸を境にして上下に巻き付いてきた。途中、少し動いてみたがその拘束も固く、頭の中で恐怖が生まれ始めた。

手慣れた拘束に、そして人の扱いが丁寧なのは、男が先ほどの女性や私のように人間を商品として扱っている、言わば専門業者なのだろう。

「んっ……やだ、きつい……」

頭が恐怖に支配され動けなくなる。私はそれを振り払うかのように身体を動かし縄を解こうとしたがそれも無駄に終わった。そうしている間に男は淡々と行動をしている。私のアゴを、くいつと掴み顔を上向けにし、一枚の小さいハンカチのような布を私の口へと押しあてた。

（な、なに？ ドラマとかだと睡眠薬で眠らせるってヤツ！？ …… 違う、眠くならない……でもこの布、口に張り付いて全然取れない……え、まさか……）

「むううつ！？ うううむむつ！」

布はガムテープのように口に貼り付き、私の言葉は呻き声だけになった。

口を塞がれ、呼吸が荒くなり、頭に熱が帯びる。必死に深呼吸を繰り返し、気を失いそうになる自分を調節した。

男は、その様子をじっと見ていた。私が落ち着くのを待っていたようにも見える。そしてある程度落ち着いたトコロで、男は私を立たせ、先ほど見た小屋へと促した。

私の足取りは重かった。



体験版はここまでとなります。

続きは本編にてお楽しみください。

ここまでのご拝読、ありがとうございました。

本作品に触れて頂いた事に最大限の感謝を。

ひなた古書堂

月見